

【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.8】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

最近のヒット曲はメロディもリズムも難しいものが多い。口ずさもうと思っても音程もフレーズも相当リピートして聴かないと覚えられない。音感が発達している方の私でさえもそうなので、きっと昭和な私と同世代の方々も同じ感覚をおもちだろうとお察しする。

百恵ちゃんからキャンディーズ、ピンクレディ、聖子ちゃん、はたまた、ユーミン、チューリップからオフコース、サザン、はたまた、かぐや姫、拓郎、陽水、などなど、昭和の歌は今も楽しく懐かしく聴いたり歌ったりするが、ノリという感覚がだいたい自分の身体リズムに合っている。たぶんバブル期、小室さんあたりから、ビートが激しくなり、ダンスとともに、リズムの変化やテンポの速さが極まってきたのではないかと思う。

ちょうど2000年の頃だったか、ボランティアで小学校に音楽の課外授業をしに行っていたことがある。児童たちに、教室のピアノでトルコ行進曲を弾いてあげたら、クラスの全員が、もっと速く弾いて、と言った。私はそれを聞いて、かなりテンポを速めたが、もっと速く、もっと速く、と言いだした。それじゃあ、ということでモーツァルトが失神を起こすくらい思いきり速くしたら、みんなきゃあきゃあ言って嬉しがって面白がって教室中を走りだした。身体全体をそのテンポと同じくらいの速さで動かして走り回っている。うーん、モーツァルトのトルコ行進曲の原曲を知ってか知らずか、ネットの進歩で情報伝達が速くなるのと比例して、きっと何もかもが速度を要求されるようになったのだ。映画の展開だって、昔の名画は1本のストーリーの中に、起承転結が一つ構成される、つまり山場は一つであるが、今では展開のスピード感が観客の要求にあっていなければ満足されないのだから、これでもかこれでもかと変化が起こる。

先日、地下鉄に乗っていて、目を見張ったことがある。

中学生くらいの女子二人、仲良さ二人組といった感じだったが、地下鉄の扉のガラスの前に立ち、ダンスの練習をしだした。スマホの音源から、イヤホンで二人の片耳ずつに入れて聞きながら、何か学校のイベントで披露するのか、ダンスシーケンスを確認するように小振り動いている。が、完璧にシンクロしている。それも、波に乗って楽しく泳いでいるかのように、くねくねと身体をくねらせて、ワンフレーズがとにかく長い、途切れることなく、かっこよくきまっている。うーん、私の弾くジャズを聴きながら、盆踊りと同じ2拍子で手拍子をするおじいちゃんたちが見たらどう思うだろうなあ。。。とか、明治大正昭和、が、昭和平成令和になったと思えばいいのだ、とか、頭の中でそんなことを思っ一人笑みをこぼしていた。

さて最近のヒット曲の話に戻そう。ちょうどラグビーワールドカップが始まったが、毎週スカッとさわやかにテレビで企業スポーツとラグビーの関係性の中で様々な人間ドラマを演じてくれる「ノーサイド・ゲーム」の主題歌、米津玄師さんの「馬と鹿」がオリコンチャートトップをと

り続けている。おなじ米津さんの「檸檬」も大ヒットしたが、これなども難曲であり、歌唱力を競う番組の課題曲にもなった。しかしながら、今どきの若い子たちは、難なく歌っている。聞くところによると、今の小学校には音楽教室がないところも多く、あったとしてもバッハ、ベートーベン、モーツァルトなど楽聖の顔を描いた額絵なんて飾ってないよ、とのこと。また、そういうクラシック音楽もレコードやCDなどで再生されることはほとんどない、とのこと。つまり、いわゆるクラシック音楽の起承転結のスピードだと、You Tubeの15秒動画に慣れきった子どもたちには、ハアだるいだるい、ということになるんだろう。しかしモーツァルトだって当時の音楽の展開のスピード感を変革したのだし、令和の子どもたちは、あんなに難解な曲を歌えて、あんなに難解なダンスを踊れるんだから、きっとその歴史や時代背景とともに現代との比較を交えて面白く伝えたら、クラシック音楽がクールに感じられるかもしれない。

次回に続く。。。